

令和8年3月2日

<卒業式式辞>

雪解けが進み、春らしい陽ざしが心地よく感じられる今日の佳き日に、長井市長 様、PTA会長 様、鷹桜（ようおう）同窓会会長 様、前校長 様はじめ、多数のご来賓の皆様のご臨席を賜り、山形県立長井高等学校令和7年度卒業証書授与式を盛大に挙行できますことに感謝申し上げます、教職員を代表して心から御礼申し上げます。

ただいま、呼名のありました160名の皆さん、ご卒業誠におめでとうございます。

6年前、皆さんが中学校に入る時は、新型コロナウイルスの影響で入学式が延期され、それまでの日常生活が大きく様変わりし、この先どうなるのかと不安な日々を過ごしたことでしょう。学校行事や部活動の大会においては、中止や規模縮小などの対応がとられ、切ない思いをした方もいたはずです。その苦しい時期を過ごした分、君たちには高校生活を満喫して欲しい、思い出をたくさん作って欲しい、やりがいを感じて欲しいと強く願ってきました。そして、皆さんは様々なことに挑戦し、その経験を通して、「人間性」を大いに高めてくれたと確信しています。

どうだったでしょうか、長井高校で過ごした3年間は。「萬物我に備はる」の校訓のもと、日々の授業では、グループでの学び合いを通して互いの能力を高め合い、部活動・各種行事では、仲間とともに喜びや悔しさを分かち合ったことでしょう。その仲間と過ごすのもあと数時間となりました。私たち教職員も皆さんがいなくなるかと思うと寂しく感じますが、本日は皆さんにとっての晴れ舞台です。無事にこの日を迎えられることに、心から「おめでとう」の言葉を送ります。

ここで、3年生の皆さんが中心となって取組んだことをいくつか振り返ります。

最初に長高祭です。今年度のテーマは「情熱の青鷹（ブルーホークス）」でした。全校生で情熱に満ちあふれた長高祭を創り上げ、一般公開には880名を超える来場者が訪れ、大いに盛り上がるイベントとなりました。長高生らしく、アイデアを凝らした企画が盛りだくさんの充実した二日間となり、特に3年生は模擬店の企画に、仲間と共に力を注ぎ、貴重な時間を過ごしましたね。担任の先生も忙しそうでしたが、一緒に楽しんでいる姿は、私からすると羨ましい光景でした。計画や準備、当日の販売を進めていくなかで、時には予想通りに事が進まなくて、予定を変更するなどその都度相談し合ったことでしょう。クラス一丸となって協力し合ったその瞬間は、まさに青春の一ページとしていつまでも記憶に残ることと思います。

さらに、生徒会執行部の皆さんが中心となって取組んだこととして、冬の校内での防寒着着用やスマートフォンの校内利用のルール作り、アイスの自動販売機導入があります。

また、ブックサンタの募金活動、小児がん支援のレモネードプロジェクトなど、ボランティア精神があふれているところも長高生ならではの誠実な取り組みです。これらのことは、後輩諸君、ぜひ受け継いでいってください。

本日、卒業生の皆さんはこの学び舎を巣立ちます。当たり前のように通ってきた教室。当たり前のように一緒に過ごしてきた仲間。けれど、その「当たり前」は、世界中で誰もが持てるものではありません。ウクライナやイスラエルなど、住む場所さえままならない人々が大勢います。

本日はここで、パキスタン出身の教育活動家、マララ・ユスフザイさんという女性について紹介いたします。2014年にノーベル平和賞を受賞している方です。卒業生の皆さんが小学校に入ったばかりの頃でしょうから、覚えている方のほうが少ないかも知れません。その時、マララさんは17歳でした。

彼女の生まれた村は、武装勢力により制圧され、女子教育が禁じられていました。彼女は10代前半にイギリスBBC放送のブログに匿名で投稿し、武装勢力による女子校の破壊活動の状況等を告発し始めます。その結果、武装勢力に狙われ、銃で撃たれてしまいました。一命をとりとめたマララさんは、イギリスに逃れます。

そして、16歳の誕生日に、ニューヨークの国連本部でスピーチを行い、教育の重要性、特に女性の教育の必要性を訴えたのです。

そのスピーチの最後の言葉は、

「One child, one teacher, one book, and one pen can change the world.」

教育によって、一人の子ども、一人の教師、一冊の本、一本のペンが世界を変える。と

彼女は、世界で何百万人もの子どもが学校に通えていない現実を伝えるとともに、学ぶことが未来をつくるのだと訴えました。銃撃されたあとに立ち上げたマララ・ファンドを通じて、現在も世界中の女子教育を支援しています。

卒業生の皆さん。皆さんが三年間積み重ねてきた時間は、決して当たり前ではありません。

支えてくれた家族、導いてくれた先生方、ともに笑い、ともに悩んだ仲間。

世界を変えるのは、特別な誰かではありません。

長井高校のスクール・ミッションの一節に「地域と地球に貢献する有為な人材を育成します」とあります。ぜひ学び続け、地球に貢献することを皆さん自身が目指してください。

皆さん一人ひとりの歩みが、まだ見ぬ誰かの希望になります。

一歩ずつで構いません。自分独自の能力に磨きをかけ、堂々と未来へ歩んでください。

保護者の皆様、お子様のご卒業誠におめでとうございます。これまで、本校教育活動に深いご理解とご支援を賜りましたこと、教職員を代表して心より感謝申し上げます。高校3年間は思春期のまっただ中でしたので、何かと心配な場面があったでしょう。そのたびに支えていただき、その甲斐あって、このように立派に成長なされたこと、感慨もひとしおのことと存じます。改めてお喜び申し上げます。

結びに、先日まで行われていたミラノ・コルティナオリンピックを話題にします。各選手の熱い戦い、素晴らしいパフォーマンスにたくさんの感動を得ることができました。その参加選手のコメントの中で、私が特に印象的だと感じたのは、フィギュアスケート女子シングル金メダリストになったアメリカのアリサ・リウ選手の言葉です。競技直後のインタビューで「なぜ緊張せずに楽しそうに滑ることができるのですか」という質問に対し、「ミスをして、それは失われるわけじゃないし、何かが残る。悪い物語もやはり物語だし、それは美しいと思うから」と語っています。ミスも物語だと語る彼女の人生に対する姿勢こそが、金メダルにつながったともいえるでしょう。卒業生の皆さんにとって、これから起きる出来事すべてが、「自分の物語」です。成功も失敗も自分ならではのもの。AIが普及する現代だからこそ、人間であることに誇りを持ち、泣いたり笑ったり、怒ったり喜んだり、自分らしさを大切に人生を謳歌して行ってください。皆さんの輝かしい未来を心から願い、校長として、そして長井高校の先輩としての式辞といたします。

令和8年3月2日

山形県立長井高等学校長 上浦 勤